急性中耳炎難治化のリスク・ファクターとしての起炎菌特異的免疫応答の検討（抄録）

荒井潤　保富宗城　島田純　鈴本正樹　池田頼彦　酒井章博　山中昇
和歌山県立医科大学耳鼻咽喉科

急性中耳炎の難治化の要因としては、近年ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP）やβ-ラクタマーゼ非産生アンピシリン耐性インフルエンザ菌（BLNAR）などの薬剤耐性菌の増加が注目されている。一方、健康な小児の鼻咽腔にもPRSP、BLNAR等の薬剤耐性菌が頻回に検出されるにもかかわらず、これらの小児がすぐに感染症を引き起こすことはない。すなわち、健康な生体は細菌やウイルスなどの外来性の異物を免疫により排除することができ、何らかの原因により生体の免疫能で排除できないほどに細菌が増加した場合に感染症が引き起こされると考える。我々は今までに、急性中耳炎の反復の要因にインフルエンザ菌、肺炎球菌に対する特異的免疫能の低下を報告してきた。今回我々は、反復性中耳炎患児を対象に、起炎菌のひとつであるモラキセラ・カタラーリスの外膜蛋白であるUspA1およびUspA2に対するの特異的抗体価の検討をELISA法により行ったので報告する。

反復性中耳炎患児の約13％に抗UspA1特異的IgG抗体の低値が認められたのに対し、約35％に抗UspA2特異的IgG抗体の低下が認められた。これらのことより、急性中耳炎難治化の病態には宿主の免疫能の関与も重要な要因である考えられた。急性中耳炎の治療では、これら宿主の免疫能にも注意を払う必要があり、薬剤耐性菌の急増という現状においては鼓膜切開、鼻腔洗浄などの排膿処置やネフライザー療法などの局所治療により生体の免疫能が処理できる細菌量にまで減量することが重要と考える。